

第二章 中卒訓練生の素質に関する実態について

1. 後期中等教育段階の進路ごとの知能について

中学校を修了した青少年が後期中等教育段階の各進路に入っていく場合、知能検査からみての各進路ごとの素質はどのようになっているのであろうか。

43年度から45年度までの3年間継続的に調査した結果が第4表である。

45年度調査における各進路ごとの知能偏差値の平均は工業専門学校 560.9で最も高く、公立高校普通課程 558.7、公立高校職業課程 554.0、私立高校職業課程 551.9、私立高校職業課程 547.3、総合高等職業訓練校 547.3、専修職業訓練校 543.0、就職者 542.0、という順序にならんでいる。

過去3年間を通じての知能からみた進路別の順位はほぼ同様傾向を示している。

さらに、年次ごとに素質からみた進路別の傾向を詳細にみると、43年度においては総高訓群は私立高校群と就職者群の中間に位置し、私立高校群の知能平均値とほとんどかわらなかった。44年度においては、就職者群の知能平均値に接近し、知能による序列化が学校教育機関と離れていくと解釈したが、45年度調査をみると、就職者群へのかたより傾向は認められず、私立高校職業課程と同様の知能偏差値 547.3を示している。

この傾向を統計的に確認したのが第5表である。総高訓を中心にして、各進路群ごとの知能平均値の差の検定をみると、各年度とも公立高校群とはっきりした有意差がみとめられる。また、私立高校普通課程、および就職群との統計上の有意差も認められる。しかし、私立職業課程と同値を示していることも加味すると、総高訓群は知能からみた場合、私立高校と就職者群との中間に序列しながら、後期中等教育機関の一角に定着しつつあると解釈できるであろう。このような知能による進路の序列化の傾向はアメリカの高校種別による知能平均値の傾向とほぼ類似している。¹⁾

つまり、アメリカ全国で実施された結果では進路別の知能指数平均値が大学進学コース IQ 114、普通高校（理系）IQ 108、普通高校（文系）IQ 106、工業コース IQ 104、技能系コース IQ 92、と報告されている。

1) 伊藤 祐時 ♪ 知能検査について、教育心理 1970.5

2) ♪ 高等工業専門学校 進路指導 1970.5

第4表 進路別知能の平均値

年次	項目	種類		公立高校		私立高校		職業訓練		就職	工専
		課程	普通	職業	普通	職業	総訓	専訓			
45	平均		58.7	54.0	51.9	47.3	47.3	43.0	44.2	60.9	
	標準偏差		6.9	7.0	7.4	6.9	8.0	10.8	9.5	6.6	
	人数		420	442	194	110	113	(8)	138	33	
44	平均		58.5	55.1	47.4	46.2	45.5	49.5	41.1	54.1	
	標準偏差		9.7	7.3	9.7	3.9	8.0	7.3	10.8	7.8	
	人数		212	197	32	(6)	93	(4)	104	17	
43	平均		59.4	55.9	51.5		49.8	—	43.3	—	
	人数		171	126	72		41		81	—	

第5表 総高訓練群の知能平均値とのt検定値

年次	進路	公立		私立		専訓	就職	工専
		普通	職業	普通	職業			
45		-14.939	-8.826	-5.058	0.001	-1.413	-2.709	7.272
44		-11.275	-10.045	-2.642		0.963	-3.152	4.915
43		-6.657	-3.944	-1.017		—	-3.441	—

(注) いずれもN=∞である。

2. 中学校での学業成績と知能との関連からみた総訓生の素質について

現状の中学校進路指導は一般的傾向として、学業成績による進路のふりわけといわれている。そして、総高訓に入校してくる青少年の学業成績は低いときめつけられている。しかし、その実態を明確にした資料は少ない。

学業の正常な進行と知能との関係は必ずしも高くはないといわれている。つまり、知能と学業成績との相関係数は高校では、+0.30～+0.80となっており、進学率の高い地域と低い地域など学校ごとの特殊事情によって、かなりのはばがあると報告されている。

ところで、中学校での学業成績と知能との関連は後期中等教育の各機関ごとにみた場合どのような実態になっているであろうか。

また、総訓生の中学校での学業成績と知能との関連は年次的にどのように変化しているであろうか、この二つの点について実態を分析してみる。

それぞれの進路ごとの、学業成績と知能との関連を図示すると次のようになる。 第3図横軸に学業成績をとり、国語、数学、理科の3科目について5段階評定の得点を合計した数値

をもって段階をしめた。縦軸は中学校調査による知能偏差値で段階をしめた。

45年調査についてみると、総高訓は左下分布の青少年を対象としている。(第3-1図)

私立高校職業課程、就職者群も総高訓と同様の左下分布の教育客体を対象としている。

つまり、知能が低く、学業成績も低いものが多くをしめている。

それに対して、公立高校普通課程や、工業専門学校では右上分布の素質の生徒を対象としている実態にある。(第3-6、3-7図)

さらに細部にわたって分析すると総高訓は私立高校職業課程とくらべて「知能が普通以上でありながら、学業成績の低いもの」が10.4%でやや多いといえる。

就職者群は総高訓や私立職業課程群より、学業成績の高い者が若干多く、なんらかの事情で就職している者もあることを物語っている。

しかし、公立高校普通課程や工専群の分布にくらべ、就職者の分布には、知能と学業成績がきわだって高い者がまったく分布していないことをみると、家庭の経済条件などの理由から高校進学を断念しなければならぬ現象は減少していると解釈できる。

つぎに第3-1図から第3-3図までの年次の経過をみると学業成績について昭和45年調査結果をみると、普通程度以上(オール3)の者は14.7%であり、逆にオール3以下が85.3%である。オール3以下の中で極度に学業成績の低い者(オール1または2か1がある者)が14.7%である。

この傾向は44年度においても同様である。

また、知能と学業成績との関連からみて、総訓生集団の1つの特徴といえるのは、公立高校普通課程3-6図の分布にはみられない左上分布があることである。つまり、もっている知能が十分に生かせず学業成績が伸びなかった者がかなりいることが注目される。

これらの傾向を示す者の率は43年度9.8%、44年度9.8%、そして45年度は15.7%である。家庭の経済事情や教育メディアの不適合などの理由によって、ある程度の知能がありながら中学校での学業成績が伸びなかった者が総高訓に入ってきており、その数が年々増加しつつある。

このように知能はありながら、中学校での学業成績の伸びなかった青少年の原因を解明し、職業との関連における能力を伸ばすことができれば、職業訓練で学ぶ青少年の満足は増大するであろうし、総高訓の役割も再認識されようとする。

さらに、第3-1から3-3図までを年次的にみると、知能と学業成績との関連が次第に正相関になりつつある特徴がみられる。

中学校における進路の決定が学業成績のみによっておこなわれている傾向から、知能をも考慮した進路指導へと若干移行している。

しかし、中学校進路指導における知能的要因の考慮が即、中学校進路指導の前進とはいえない

いであろう。職業訓練への進路を選択する場合、職業訓練職種に関する興味や関心などの特性が十分に配慮されて、進路決定がおこなわれないと、後述する事例のごとき職業訓練を中退で落こす青少年が増加する可能性もある。

ゆえに、15才時における職業訓練への進路決定にあたっては、素質的特性が普通以下であるという消極的な理由をもってなされるべきではなく、技能系の職業を志向する適性、興味を十分に検討し、積極的な理由をもって進路決定が援助されるべきことを強調したい。

45年度 総訓

N=108

学業成績 知能	3~4	5~6	7~8	9~10	11~12	13~12	15
70以上							
65~69		1	1	1			
60~64			1	4			
55~59	1	6	4	2			
50~54	1	8	⑪	3			
45~49	3	7	6	3	1		
40~44	2	⑫	7	2			
35~39	5	7	1				
34以下	4						

第3-1図

44年度 総訓

N=91

	3~4	5~6	7~8	9~10	11~12	13~14	15
70以上							
65~69							
60~64				1			
55~59		2	1	4			
50~54	2	5	7	4			
45~49	1	⑬	⑭	4	2		
40~44	4	⑮		2			
35~39	4	6	4				
34以下	1	2					

第3-2図

昭和43年度 総訓

N=41

学業成績 知能	3~4	5~6	7~8	9~11	11~12	13~14	15
70以上							
65~69							
60~64		2	2	4			
55~59				3	1		
50~54		2	4	2			
45~49		3	4	4			
40~44	3	1	2				
35~39		1	1				
34以下		1	1				

第3-3図

私立職業課程

N = 105

学業成績 知能	3~4	5~6	7~8	9~10	11~12	13~14	15
70以上							
65~69			9				
60~64		2		1	1		
55~59			2	3		1	
50~54	2	7	⑮	8			
45~49	4	10	⑪	2			
40~44	3	5	7				
35~39	4	6	2				
34以下	2	3					

第 3 - 4 図

就職者群

学業成績 知能	3~4	5~6	7~8	9~10	11~10	13~14	15
70以上							
65~69	1						
60~64		1		1	1		
55~59		3	3	2	3		
50~54	6	7	10	3	1		
45~49	5	17	5	2			
40~44	14	8	3	1	1		
35~39	10	4	1				
34以下	13	6	1		2		

第 3 - 5 図

公立普通課程

学業成績 知能	3~4	5~6	7~8	9~10	11~12	13~14	15
70以上					7	11	5
65~69				3	11	19	15
60~64			1	11	40	31	26
55~59			1	25	⑬	29	13
50~54			7	22	28	8	1
45~49		2	1	9	9	1	1
40~44		1	1	3	3	1	
35~39					1		
34以下		1					

第 3 - 6 図

工 専

学業成績 知能	3～4	5～6	7～8	9～10	11～12	13～14	15
70以上						2	
65～69						2	2
60～64				1	1	⑤	1
55～59						2	3
50～54		1			1	1	
45～49							
40～44							
35～39							
34以下							

第 3 - 7 図

3. 中卒訓練生集団の素質傾向の特徴について

3 - 1 知能検査からみた素質の実態分析

前節において、進路別比較における中卒訓練生の知能からみた素質傾向をみてきた。

本節では、総高訓に入校してから改めて実施した知能検査の結果をもとに、個々の訓練生の素質を解釈する基準として、まず全般的に、総訓生集団の素質傾向の特性がどのようになっているか、過去3年間の実態を明らかにし、その実態分析をもとに現状の職業訓練における訓練内容や訓練方法との関連をどのようにすれば効率的な職業訓練が実践できるかを考察する。

a. 43年から45年までの素質の年次変化

「昭和45年度調査における中卒訓練生の知能平均値はSS47.0であり、標準偏差は8.3である。この値は前述した中学校調査による総訓生集団の知能平均値SS47.3とほぼ同値であり、調査方法の信頼性のあることを示している」。

一般に知能検査は中央値が50になるように標準化してあるので、日本人全体の母集団からみて中卒訓練生集団は知能平均値としてはやや低い値を示しているといえる。

つぎに、43年からの3年間の知能平均値の変化実態は第6表のごとくである。

第1節で述べたように、大きくみれば、後期中等教育の一角に位置しているが、中卒訓練生の知能平均値は徐々にではあるが年次的に低下している傾向がみられる。つまり、知能平均値が43年でSS48.5、44年でSS48.0、45年でSS47.0となっている。年度間の平均値の検定をするまでもなく、十分な標本数があるので、知能検査でとらえた知能平均値が年次的に徐々に低下している。また、分布について標準偏差を年次的にみると、43年でSD7.9、44年でSD8.1、45年でSD8.3とやはり徐々に集団の分散が大きくなっている。

さらに、知能偏差値の段階ごとの分布をみると、中卒訓練生集団の素質の1つの特色がみられる。つまり、知能偏差値34以下の精神薄弱者に近い者の比率が年次的に増加する傾向がある。それに対して、知能偏差値35～44段階の左寄の比率がやや減少し、知能偏差値55～64段階

の比率がやや増加する傾向がみられるのである。

この傾向はさらに検討を加えるに値する重要な点である。

平均値としてはやや低い値を示しているが、素質低値者と素質高値者がともに増加する傾向をみせている。

さらに、知能偏差値SS 55以上のすぐれた知能の者が22.0%在籍している事実は注目すべきことであり、前述のごとく、その傾向が強くなりつつあることをみれば、これらの青少年の期待にこたえることが強くのぞまれるのである。³⁾

素質の分布傾向についてさらにのべると、公立高校のような教育集団の場合、入学試験などによってある一定の知能水準でふるわれるのが通常であるが、職業訓練における中卒訓練生集団には、このように知的に低い者から高い者まで広く分布しているのである。

つまり、中卒訓練生の素質はかなり多様であり、職業訓練開始時点における学習者のレディネスをほぼ等しいものとして、全員を同一線上から出発していくことは不可能な実態にある。

しかし、現実には素質が同一であるとして職業訓練が開始されているところに問題がある。

ゆえに、素質の個人差を適確に把握し、職業的学習に入る以前に、集団訓練に必要な基礎的な学力などは一定水準に引きあげておかないと、集団方式による職業訓練は訓練生全員について訓練効果をあげることが困難になると考えられる。

このような傾向は単に職業訓練領域の問題ではなく、素質傾向の類似している私立高校職業課程についても同様と思われる。

第6表 中卒訓練生集団の知能平均値の年次変化

項	年度		
	43	44	45
平均値 (AV)	48.5	48.0	47.0
標準偏差 (SD)	7.9	8.1	8.3
調査人員 (N)	777	1447	1631

第7表 知能偏差値の分布 (中卒訓練生)

段階 年度	34以下	35~44	45~54	55~64	65以上
	43	5.7	27.7	47.6	18.8
44	5.1	24.8	49.6	19.9	1.3
45	6.2	24.2	47.6	20.2	1.3

3) 皇 晃之 「後期中等教育の現状と課題」 (学校経営) S 41年

P 42、各種学校、青年学級、職業訓練所には、約10%のIQ 110以上の青年がそれぞれ在学している現実には注目するに値するという記述があるが、今回の調査では20%以上も総高訓に含まれている現実には具体的な職業訓練の実践にすぐに結びつけて考えるべきと思う。

b. 総高訓別の素質傾向

総高訓は全国各県に1ないし2校ずつ設置されている。おのおのの地域において総高訓の位置づけは異なるといわれている。

総訓生の素質からみて、各総高訓別の特色はどのようにあらわれているのであろうか。

調査対象総高訓数は延24校であり、昭和43年度から3年間継続して調査した校は4校である。また、44年と45年に調査実施したのが10校、43年と45年に調査したのが2校である。

まず、総高訓別の知能平均値は年次ごとにほぼ近似値を示している。高い知能平均値を示す総高訓は毎年その傾向にあるし、逆に低い知能平均値を示す総高訓は毎年低い平均値を示しており、大きな変動は認められない。つまり、中卒訓練生の素質は地域的に比較的固定している。(第8表) また、総高訓間には中卒訓練生集団の素質にかなりの差異が認められる。

知能平均値の高い総高訓は「15」、「05」であり、逆に低い総高訓は「12」、「10」、「08」、「04」である。

年度ごとにみると、43年度知能平均値の最高はSS52、最低はSS44であり、44年度は最高SS52、最低SS43であった。また、45年度は最高SS50、最低SS44である。

さらに、総高訓別に知能平均値の年度ごとの変化をみると、次のような特色がみられる。つまり、44年と45年とを比較すると、知能平均値が低下している総高訓は調査総高訓14校のうち、7校で50%を示している。

逆に、45年の値が44年より高い総高訓はわづかに3校である。この3校のうち2校は、中卒訓練生の知能平均値そのものが低い総高訓である。つぎに、平均値と標準偏差値との関連から知能平均値の低下する総高訓を第8表と第9表から分析すると、二つの型がある。(1) 年次的に知能平均値が低下するにつれて、標準偏差が小くなる型(総高訓「15」)

(2) 標準偏差が大になる型(総高訓「05」)、とである。つまり、ある一定水準の素質の訓練生にかたまわって総高訓の知能平均値が低下する場合と、多様な素質の訓練生が入ったために総高訓の知能平均値が低下する場合があると解釈できる。

以上のような総高訓ごとの素質傾向を詳細にみるために、第10表に知能偏差値段階ごとの分布状況を示した。

知能平均値の高い総高訓「05」「15」には、34以下の知能偏差値の者が極くわづかであり、頻数が中央に集まり、両側にうまくバランスして分布している。それに対して、知能偏差値の低い総高訓「04」「10」「12」には知能偏差値SS34以下という者が比較的多く分布しているか、または知能段階の低い側、つまり左寄り分布を示している。

43年度報告においては、総高訓ごとの知能平均値の差異は各総高訓に含まれる訓練職種構成に起因すると結論したが、かならずしも訓練職種構成によるものではなく、総高訓ごとの知能平均値に差異があると解釈した方が順当であろう。

例えば、職業訓練の代表的な訓練職種である機械科訓練生について、総高訓ごとの知能偏差値の分布(第11表)をみると、「05」「15」総高訓の機械科はやはりその総高訓全般の傾

向と同様な分布を示している。逆に、「10」、「08」「12」の機械科も、各総高訓に同様に知能の低い段階にかたよっているのである。以上の事実から、3ヶ年の調査を通してみると総高訓ごとの素質の実態は各総高訓によって差異があると結論づけられ、43年の結果解釈を修正する必要がある。

さて、このように各総高訓に素質の差異がみとめられるが、その原因はなにであろうか。

一般的には、高校進学率の高い地域では総高訓への応募者が減少し、訓練生の知能平均値が低くなり、逆に高校進学率の低い地域では訓練生の知能平均値が高くなるといわれている。

そこで、年度別に県の高校進学率と総高訓の知能平均値の関連をみたのが第5-1図から第5-3図である。

予測に反し、この両者には一義的な関連は成立しない。すなわち、少なくとも県の高校進学率に影響されて総高訓の素質の差異を生じているとは解釈できない。

あえてグループ化すれば大きくは素質の上位群、中位群、下位群の三つに分けられる。素質中位群は、中学校教師の進路決定意識のうちに、各地域の後期中等教育として総高訓が位置づけられ、高校進学率の変化等によって影響をうけない一定の進路として固定してきている地域もあるといえるであろう。

さらに、素質上位群、総高訓の知能平均値の高い原因を調査した結果では、総高訓「15」では近接する地域内に、専修職業訓練校や私立高等職業課程がないことが影響しているとみられる。素質下位群の知能平均値の低い「12」総高訓について43年44年度をみると、定員確保のために素質のいかに問わず入校を認めている現象がみられたが、45年度になって、一定水準以下の者の入校を認めない方針に切りかえることによって総高訓の知能平均値が若干上昇している。

このように、入校試験の方式など訓練校で改善可能な要件に努力をかたむけた総高訓の知能平均値が変化していることは注目にあたいする。

年度 訓練校	43	44	45
01	・	47	50
02	・	48	48
02	・	49	48
04	・	45	45
05	・	52	50
06	・	48	46
07	・	48	46
08	・	45	44
09	・	47	45
10	47	43	45
11	・	48	48
12	45	43	46
13	・	46	・
14	48	47	47
15	51	52	50
16	49	・	50
17	52	・	48
18	・	・	40
19	・	・	46
20	・	・	50
21	52	・	・
22	44	・	・
23	50	・	・
24	51	・	・
25			

第8表 総訓別の知能平均値
(中卒訓練生)

年度 訓練校	43	44	45
01	・	7.3	6.9
02	・	7.8	8.2
03	・	8.2	8.0
04	・	8.7	10.7
05	・	5.9	6.9
06	・	8.1	9.8
07	・	9.3	8.7
08	・	7.1	8.5
09	・	8.2	8.2
10	・	8.9	8.8
11	8.1	7.1	8.1
12	8.2	8.2	7.8
13	・	6.6	・
14	6.7	7.5	6.5
15	7.6	7.1	6.6
16	7.5	・	6.6
17	7.4	・	7.6
18	・	・	13.3
19	・	・	7.9
20	・	・	6.5
21	6.0	・	・
22	6.8	・	・
23	6.9	・	・
24	7.4	・	・
25			

第9表 総高訓の知能の偏差値
(中卒訓練生)

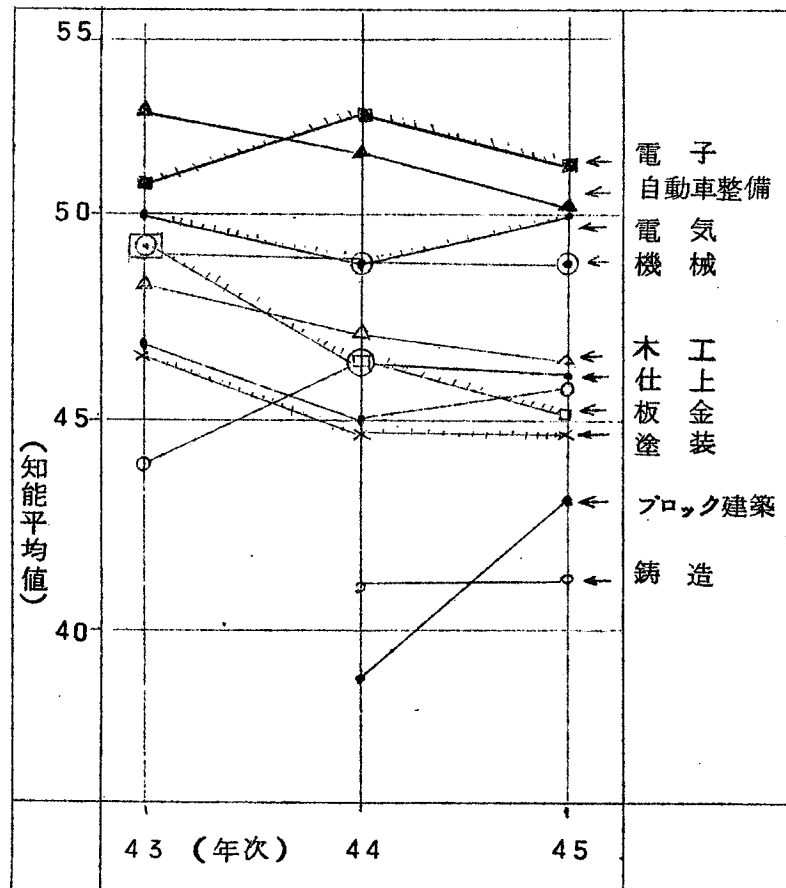
第10表 校別 知能分布 (中卒訓練生) (人数)

段階 校名	34以下	35~44	45~54	55~64	65~74	75以上	
01	3	22	87	47	3		162
02	6	31	57	31	2		127
03	5	28	53	30	3		119
04	10	23	29	13	2		77
05	2	16	49	20	2		89
06	4	20	22	13			59
07	8	30	44	15	1		98
08	4	22	20	6			52
09	10	45	49	10	2		116
10	9	19	26	27			81
11	12	39	75	33	3		162
12	7	18	44	14			83
14	4	18	51	11			84
15	1	16	62	16	1		96
16	1	15	35	22			73
17	3	7	16	7			33
18	5	1	4	3			13
19	7	18	39	12	1		77
20		5	10	4	1		20
	101	393	772	335	21		1622

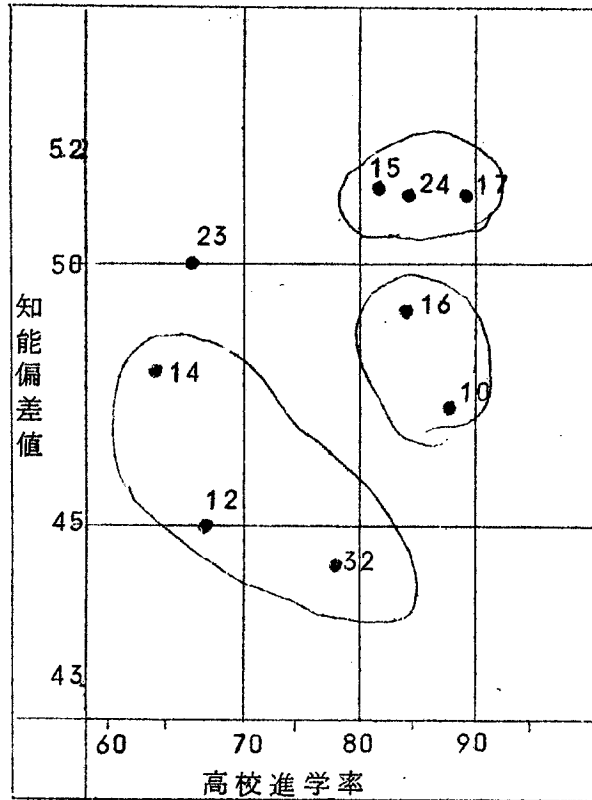
第11表 校別知能分布

機械科 (中卒)

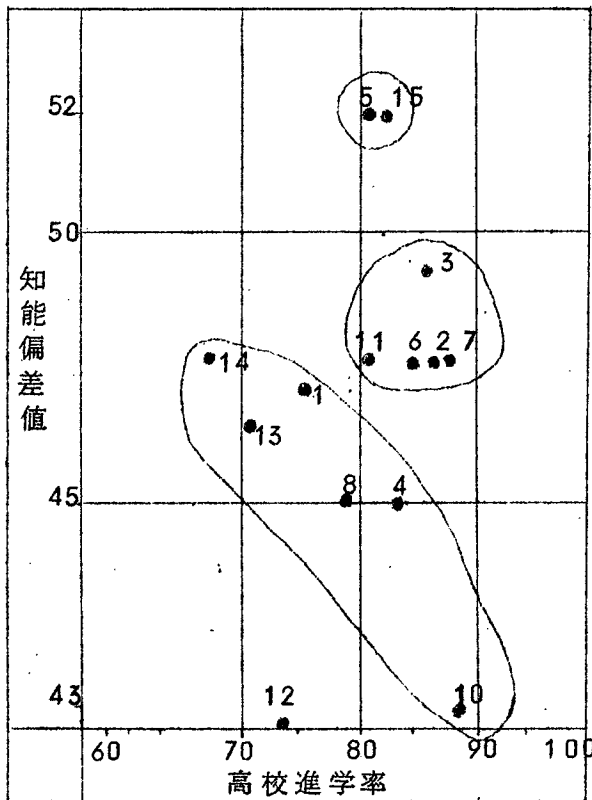
校名	34以下	35~44	45~54	55~64	65~74	75以上	
01		3	12	16			
02		1	11	10	1		
03		4	11	7	1		
04	1	5	7	2			
05		1	14	3	1		
06		6	3	4			
07		4	7	5			
08	2	6	8	2			
09		8	11	4	1		
10	2	1	5	6			
11	1	3	23	7	1		
12	2	3	10	1			
14	1	6	12	2			
15		1	16	4	1		
16		5	6	5			
17		3	7	2			
18	4		2	2			
19	1		9	3			
20		3	5	1			
	14	63	179	86	6		348
	4.0	18.1	51.4	24.7	1.7		



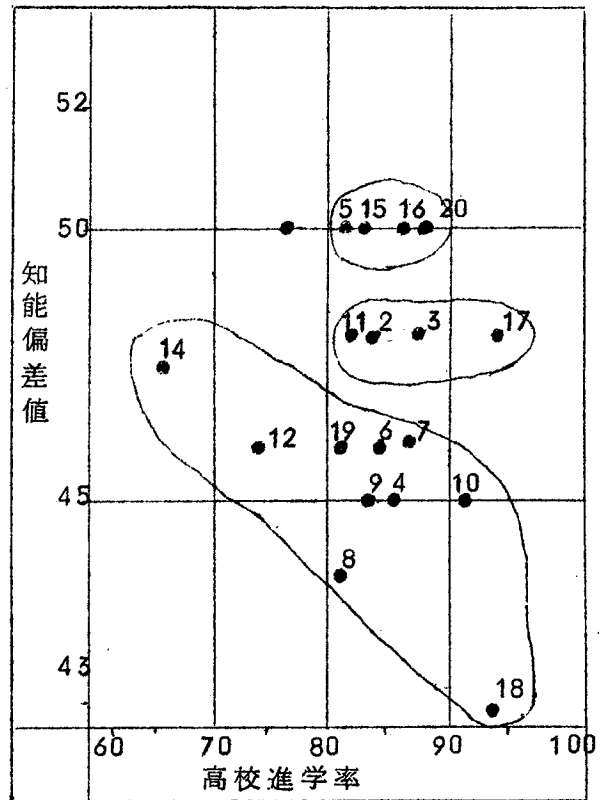
第4図 訓練職種別知能平均値の年次変化



第5-1図 昭和43年度



第5-2図 昭和44年度



第5-3図 昭和45年度

○ 訓練職種別の素質傾向

すでに44年度報告で示したように、訓練職種によって明確な知能による職種順列ができている。

過去3年間における、この職種順列は変動しておらず、第4図に示すような順列になっている。

また、年度別の知能平均値の変化をみるとはっきりと低下の傾向を示している訓練職種は自動車整備科、板金科、木工科、塗装科である。それに対して、3年間ほぼ安定した知能平均値を示す訓練職種は電子機器科、電気機器科、機械科である。

このような知能平均値による職種の順列ができる理由は入校時における学級編成に関係している。つまり、生徒の第1希望職種から入校学業テスト成績の順に配分していることに関連する。最も希望の多い職種は自動車整備科であり、塗装科、鋳造科への応募者は少ないのが一般である。

生徒の希望を入校時の学業成績のみで決めていけば、当然訓練職種別に知能平均値の順列がつくわけである。（第12、13表）

しかしこのような学級編成方式が職業訓練を实践する前段階となっていることは、個々の訓練生の個性尊重という立場からみた場合、妥当とは考えられない。

ブロック建築科、鋳造科は知能が低くても可能な訓練職種といえないであろうし、逆に自動車整備科は知能が高ければよいということもいえないであろう。興味や関心の要件が学級編成に加味される必要があると思う。

さらに、現状の知能水準でそれぞれの訓練職種における学習を遂行でき、能力形成ができるかどうかは訓練過程の訓練成績調査によって検証される必要があるが、自然にできあがっている訓練職種の知能による順列現象は、15才の青少年段階においては、青少年が好むと好まざるとにかかわらず、ある職種にふり分けられている感が強く、職業の自由選択という見地からしてもこのまま知的側面だけによる学級編成方式を継続するのは問題であると考えられる。

第 12 表 職種別知能平均 (中卒訓練生)

職種	年度			
	43	44	45	
01	電 子	51	53	51
02	電 気	50	49	50
03	機 械	49	49	49
04	仕 上	47	45	46
05	精 機	・	49	40
06	自 動 車	53	52	50
07	板 金	49	46	45
08	溶 接	44	46	46
09	鋳 物	・	41	41
10	配 管	・	44	42
11	木 工	48	46	46
12	塗 装	47	45	45
13	プ ロ ッ ク	・	39	43
14	製 図	・	・	・
15	織 機	・	39	52
16	フ ラ イ ス	・	46	48
17	銅 器	・	38	・
18	製 罐	・	47	42
19	第 2 自 動 車	・	52	52
20	電 工	・	48	55
21	建 築	・	50	49
22	金 型	・	・	(57)
23	原 子 力	・	・	・
24	無 線	・	・	・
25	印 刷	・	・	41

第 13 表 職種別知能偏差値 (中卒訓練生)

職種	年度		
	43	44	45
01	7.7	6.5	5.6
02	7.9	6.4	7.0
03	7.1	7.1	8.3
04	8.4	9.2	8.7
05	・	6.9	5.1
06	7.0	6.7	6.9
07	7.2	8.1	7.4
08	6.8	9.1	7.3
09	・	9.4	9.5
10	・	7.0	8.5
11	7.4	7.6	8.9
12	8.3	8.6	10.4
13	・	8.1	6.5
14	・	・	・
15	・	8.4	1.0
16	・	7.3	7.5
17	・	8.5	・
18	・	9.1	7.0
19	・	4.5	5.4
20	・	3.7	5.0
21	・	5.6	6.0
22	・	・	(0)
23	・	・	・
24	・	・	・
25	・	・	3.5

3-2 職業適性検査からみた素質の実態

青少年の素質を把握する場合、単一の検査のみでは、その青少年の保有する素質のある側面しかみることができない。

そこで、本研究では二つの検査を組合せて素質の実態を把握するとともに、実態の信頼性を高めようとしている。

前節においては、知能検査でとらえた素質の実態を明らかにした。

本節では、職業適性検査からみた中卒訓練生集団の素質の実態を分析する。

1 中卒訓練生集団の全体的傾向、

職業適性性能の中卒訓練生集団の平均値は昭和 45 年調査で見ると、第 6 図のごとくである。一般知能 (G) 91、言語能力 (V) 80、算数能力 (N) 87、と知能に関連する性能は同年令標準母集団より低い値を示している。

書記的知覚 (Q) 96、空間判断力 (S) 107、形態知覚 (F) 107、眼と手の共応 (A) 112、運動速度 (T) など知覚に関する性能は同年令の標準母集団の規準より高い値を示している。

さらに、指先の器用 (P) 85、手腕の器用 (M) 89 と手の器用さに関する性能は標準化母集

団より低い性能である。

つまり、中卒訓練生集団の適性性能は、第6図に示す平均値であるが、職業適性検査の標準化段階に母集団とされた基準（100）と比較すると、知能に関する性能および手の器用さに関する性能はやや低いが、知覚に関する性能はやや高い値を示す特性をもっているといえる。

知能検査でとらえた素質はすでに知能偏差値で示したが、中卒訓練生集団の値は知能平均値47（昭和45年）であった。この値は職業適性検査でとらえた一般知能性能値G 91と同一水準の知能を示している。ゆえに、中卒訓練生集団の知能平均値が信頼性のある値であることが証明された。

つぎに、このような中卒訓練生集団の職業適性検査での性能が、職務を遂行するに値する水準にあるかどうか検討する。

仮に、労働省職業適性検査手引に示されている職務群別の所要性能基準と比較することにより、職業訓練の代表的な訓練職種を機械科とすると、同基準では、G-N-S-M（90-90-90-75）が機械工としての基準となっている。つまり、「各種の金属切削工作機械を操作し、手道具を使って金属加工、機械工具の部品の作成、組立、調整に従事したり、あるいは機械設備の修理、保全を行ない、青写真の読取り、計測器の使用、現場計算の能力が要求される作業を主体とするもの」の職種群を基準としてみよう。

中卒訓練生集団の昭和45年の職業適性性能はそれぞれG（一般知能）91、N（算数能力）87、S（空間判断力）109、M（手腕の器用）98である。

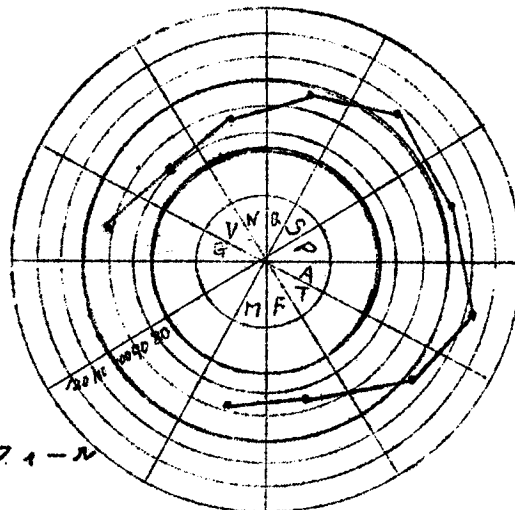
このような角度からみれば、現状の中卒訓練生集団は全体として、技能職を遂行する素質をもっていると解釈できる。

さらに、中卒訓練生集団の適性性能の段階ごとの度数分布をみたのが第14表である。

10項目の適性性能ともに、高い性能から低い性能へと分散が大きい。

この分散の大きい傾向の中で注目すべきことは、120以上の高い性能点を示している中卒訓練生がかなり在籍していることである。

ゆえに、このような高い適性能力をもつ訓練生が充分に能力を高められるような職業訓練の内容、方法の準備が必要である。



第6図 45年中卒訓練生
職業適性平均プロフィール

第 14 表

職業適性性能得点の度数分布 (S 45) (中卒)

	G	V	N	Q	S	P	A	T	F	M
0～ 9					1	1	2	1		4
10～ 19		2	1	1		1	4	5	4	1
20～ 29	3	5	8	2			1		10	7
30～ 39	15	26	36	3		4	2	6	17	9
40～ 49	20	43	60	9	5	6	12	14	41	36
50～ 59	65	144	69	29	7	33	16	30	89	75
60～ 69	107	147	112	76	13	30	31	51	160	144
70～ 79	166	258	162	152	64	87	63	99	192	165
80～ 89	228	230	222	245	137	117	137	166	243	224
90～ 99	245	269	232	235	190	198	178	227	266	247
100～ 109	230	142	232	227	243	247	169	245	159	189
110～ 119	160	66	132	199	261	244	219	217	78	132
120～ 129	80	18	60	104	215	166	196	140	39	71
130～ 139	18	7	20	41	143	119	119	77	29	28
140～ 149	11		10	19	58	67	98	51	19	15
150～ 159	6			7	14	21	45	9		5
160～ 169	3			5	4	11	27	11		
170～ 179				2	2	3	14	5	1	
180～ 189				1		1	13	2		
190～ 199			1				5	1		
200							4			

2. 適性性能の年次的変化

43年、44年、45年と3年間にわたって、1学年次に職業適性検査がおこなわれたことはすでに述べた。

その3年間の適性検査からみた素質の変化傾向を分析する。(第15表)

大きくみて、3年間の素質の変化はなく、G性能、V性能、N性能など、知能に関連する能力は90点段階におちついている。しかし、この段階にあって、43年のG93が、44年G92、そして45年G91と徐々に低下傾向を示している実態である。

この傾向は知能検査からみた素質の年次的変化と同一の傾向を示しており、中卒訓練生集団の素質に関する一つの特徴と解釈できる。(この傾向を図示したのが、第7図である。)

また、年次的変化の傾向として、知能に関する性能が徐々に低下するのに対して、逆に空間判断力、形態知覚、眼と手の共応、運動速度など知覚能力に関する性能点は年次的に高くなっている傾向にある。

つまり、視覚的弁別、視覚的鋭さの能力、手の迅速な運動をコントロールする能力、刺激に対する瞬時的反応や連続的運動反応を速に行う能力に関する性能点は年次的に徐々に高くなっている実態である。

この傾向をそのまま中卒訓練生の集団の素質特性と断定することは現在のところむづかしい

であろう。しかし、中学校進路指導において、言語の意味および言葉に関連する観念を理解したり、見聞したことや自己の考えを明確に言い表わす能力や算数能力など学業成績によって進路が振り分けられており、知覚、感覚能力、器用さなどの素質能力はかえりみられていないことのあらわれとも解釈できないであろうか。

仮に、中卒訓練生集団が知能に関連する素質にくらべ、知覚に関連する素質がすぐれるととらえれば、訓練方法について次のようなこともいえるであろう。

従来、学校教育においては文字や言葉の使用が中心であって、それに視聴覚を加える教育方法であったが、中卒訓練生の素質特徴をいかすとすれば、知覚能力を生かした学習メディアを中心にして、言葉や文字をおぎなう訓練方式による思考的能力を高めることも有効かもしれない。特に、学習過程における提示段階への適用ではなく、学習情報フィードバックの段階で知覚的能力が生かされるならば、訓練効率はあがると思われる。(ただし、この見解は拡大解釈があるので、訓練方法研究の領域で検証される必要がある。)

過去において言われたように、「頭のわるいものは器用さでおぎなえる」という流言は43年訓大調査報告で否定された。ゆえに、中卒訓練生集団の特徴としてはいえないのである。

しかし、中卒訓練生集団の適性性能を3年間累積していえる特徴として、まれではあるが、知能が低いにもかかわらず、手の器用さでかなり高い値を示す訓練生がいることである。

このような、訓練生の適性、能力をみおとさないように十分な注意が必要である。

個人差の原則として、「一般的にいえることは、各種の能力特性が高い優秀な個人では、各能力特性間の内変異は一般に小である。

逆に平均能力の低い個人では、各特性間の内変異が大で、得手と不得手との開きが大きい。」⁴⁾とされている。

知能の低い個人がいれば、何か他の能力特性によいものがないか発見する姿勢が必要である。その意味では、少数ではあるが、知能が低く、器用さにすぐれる訓練生の存在も重視されるべきである。

4) 清原道寿・松崎 技術教育の学習心理

第15表 職業適性平均値の年次変化

(中卒訓練生)

		G	V	N	Q	S	P	A	T	F	M
AV	43	93	83	90	96	105	97	104	92	84	86
	44	92	81	89	95	106	98	103	98	90	94
	45	91	80	87	96	109	107	112	102	85	89
SD	43	•	•	•	••	•	•	•	•	•	•
	44	20.0	18.9	22.7	21.3	19.6	21.0	26.3	25.3	22.1	23.9
	45	21.5	19.8	23.5	21.3	20.2	23.5	28.1	24.0	22.4	23.2
		一般知能	言語能力	算数能力	書記的知覚	空間判断力	形態知覚	眼と手の反応	運動速度	指先の器用	手腕の器用

3. 総高訓別の適性傾向

知能検査からみた素質には総高訓による差異が認められた。

職業適性検査からみた場合、総高訓による素質の差異があるであろうか。

その実態を職業適性性能の総高訓平均値でしめしたのが第16表である。(昭和45年)

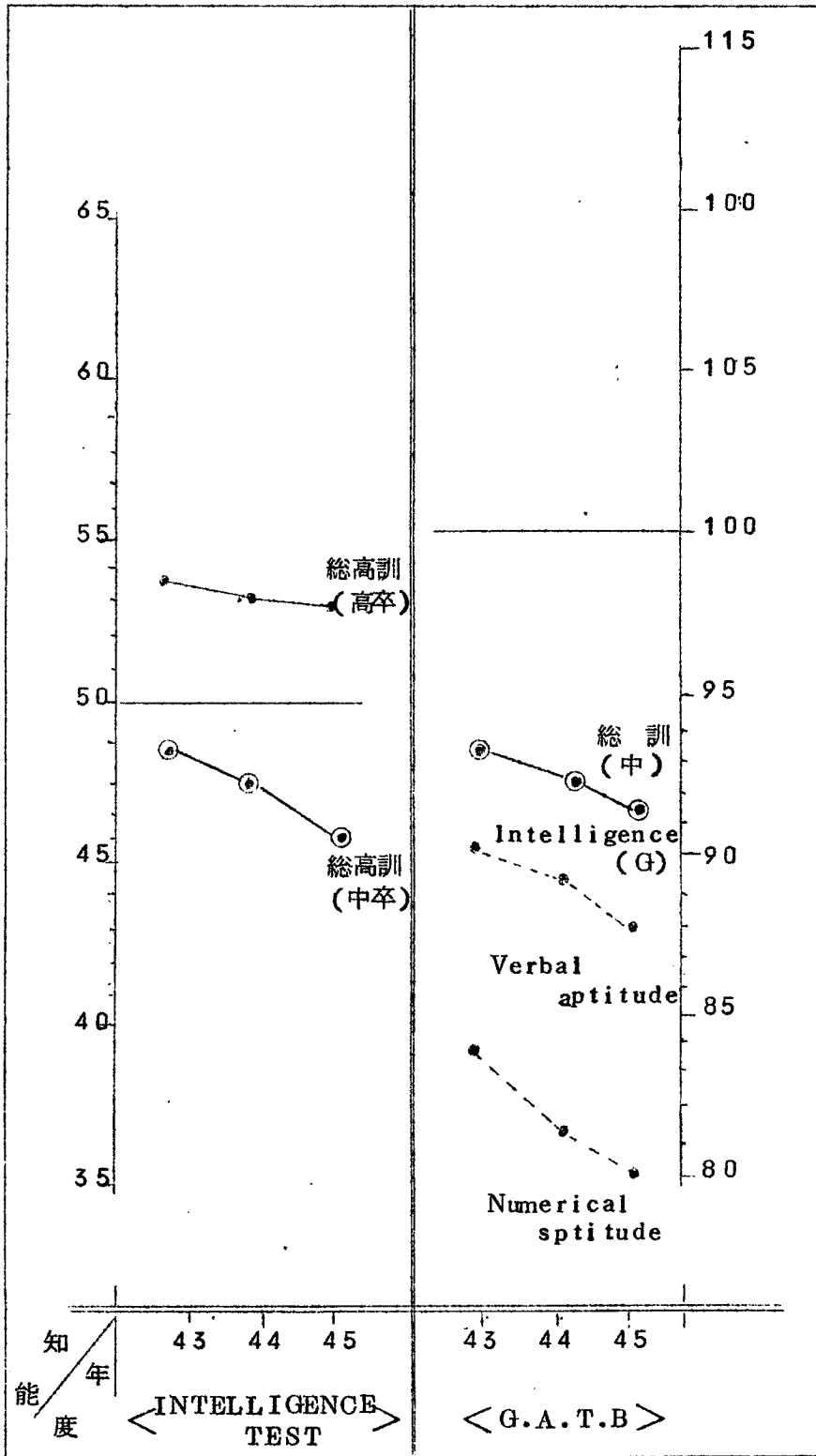
労働省基準、G-N-S-M(90、90、90、75)でみると、基準通過校は総高訓「01」、「02」、「15」、「16」、「20」である。

基準を通過しない校は総高訓「04」、「07」、「08」、「09」、「10」、「18」であり、一般知能(G)と算数能力(N)で基準以下の値になっている。

最も適性平均値が高い総高訓と最も平均値が低い総高訓とは第8図のプロフィールに示すような差異がある。

以上のように、職業適性検査からみた素質においても総高訓による差異がある実態があきらかになった。

訓練生ひとりひとりの訓練指導を实践する場合、校ごとの中卒訓練生集団の中の個人としてとらえる必要がある。その意味で、総高訓ごとの職業適性平均値は一つの指標となるであろう。

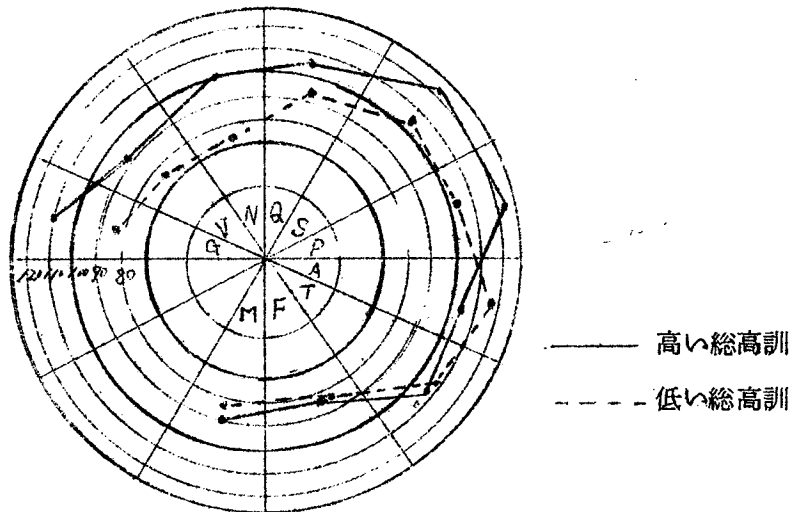


第7図 総高訓生集団の3年間の素質の変化

第 16 表 職業適性性能の校別平均値

(中卒訓練生)

校名	(G)	V	(N)	Q	(S)	P	A	T	F	(M)	
01	◎	99	85	96	97	115	112	117	103	88	87
02	◎	95	84	89	95	109	102	109	101	80	104
03	◎	90	78	88	94	109	109	115	103	87	80
04	×	82	72	78	89	104	104	101	95	72	85
05											
06	△	89	77	82	98	110	107	96	92	83	84
07	×	84	74	81	94	103	100	98	93	75	86
08	×	82	75	81	90	100	97	97	90	87	89
09	×	85	75	85	97	103	111	114	103	80	86
10	×	86	79	75	94	106	104	117	107	83	87
11											
12	○	92	78	86	100	112	107	113	105	75	86
14	○	89	78	88	88	104	107	114	109	100	91
15	◎	95	81	94	104	114	112	127	114	100	98
16	◎	103	88	94	98	120	109	117	104	89	94
17	○	96	81	88	97	120	110	110	101	87	105
18	×	80	76	76	91	101	91	97	93	87	66
19	○	90	81	87	95	103	104	115	101	85	74
20	◎	110	92	110	107	123	123	108	106	83	90



第 8 図 適性性能の高い総高訓と低い総高訓のプロフィール

4. 訓練職種別に見た適性傾向

訓練職種ごとに45年度調査の適性性能平均値を示したのが第17表である。

訓練職種ごとに適性性能がかなり異なることが認められる。

代表的な訓練職種について、プロフィール表示したのが第9-1図から第9-11図である。訓練職種群合格規準（松本基準）と中卒訓練生集団の適性性能平均値を比較すると、電子科、電気科、機械科、自動車整備科、板金科、溶接科、木工科は規準とほぼ類似のプロフィールないしはそれ以上の高い値を示すプロフィールを表している。つまり、各職種ごとにみれば、それぞれの職種で要求される性能をもち、職業訓練の効果が期待できる集団であると解釈できよう。

また、訓練職種ごとに適性性能の標準偏差を求めたのが第18表である。

標準偏差が小さく、適性性能からみた素質がまとまっている職種と、標準偏差が大きく、その職種に入っている訓練生の素質がばらばらの訓練職種が存在することがわかる。

以上のように、訓練職種ごとに素質が異なるのであるから、訓練方法なども各職種ごとに配慮される必要性を再認せざるを得ない。

知能を学習するに必要な一般的な素質としてとらえ、職業適性を職業的行為遂行の素質あるいは職業的学習をするに必要な素質としてその実態をみてきた。

以上のような、中卒訓練生集団の素質特性を十分にふまえた上で、ひとりひとりの訓練生がとらえられ、適性、能力に応じた職業訓練が実践される必要がある。

第 17 表

職業適性性能の職種別平均値

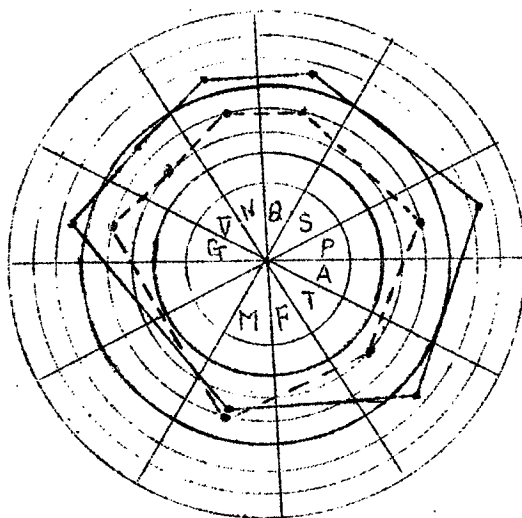
(中卒訓練生)

職 種	(G)	V	N	Q	S	P	A	T	F	M
01 電 子	103	89	104	105	114	113	117	108	94	88
02 電 気	103	89	97	100	116	112	116	106	89	96
03 機 械	93	81	91	98	109	107	111	103	85	91
04 仕 上	87	78	83	85	108	104	112	101	83	90
05 精 機	74	74	64	87	89	92	112	106	67	76
06 自 動 車	102	88	96	102	115	115	119	107	88	92
07 板 金	85	76	81	93	106	106	108	100	84	85
08 溶 接	89	76	85	92	107	105	111	101	82	80
09 鑄 造	74	67	68	89	100	98	104	91	79	79
10 配 管	78	57	74	64	114	105	79	82		
11 木 工	89	77	84	91	110	104	109	99	88	92
12 塗 装	80	73	68	98	104	104	113	99	81	85
13 プ ロ ッ ク	78	66	78	92	92	100	99	90	63	70
14										
15 織 機	84	77	88	83	109	100	98	100	84	102
16 フ ラ イ ス	87	75	86	93	106	102	119	106	84	89
17										
18 製 カ ン	75	64	78	98	101	112	103	94	86	89
19 第2自動車	101	92	98	104	113	115	123	98	92	85
20										
21 建 築	101	88	66	102	116	119	108	102	83	90
22 金 型	126	110	118	115	122	111	110	105	95	108
23										
24										
25 印 刷	82	89	67	109	86	100	107	102	87	68

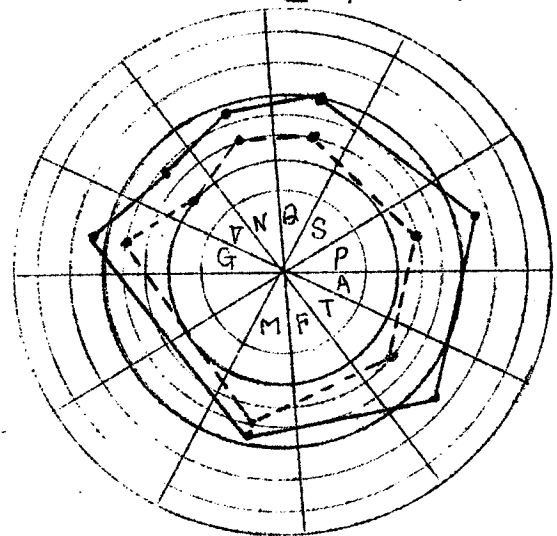
第 18 表

職能 種	G	V	N	Q	S	P	A	T	F	M
0 1	14.0	18.4	18.0	16.4	18.2	18.7	29.1	19.8	20.0	24.0
0 2	19.5	18.0	21.4	20.7	19.4	21.8	26.6	23.6	23.7	21.1
0 3	20.9	19.6	22.6	21.3	19.8	24.4	29.5	22.6	21.0	24.9
0 4	21.1	18.9	22.1	20.5	23.0	23.1	26.8	22.8	25.7	25.0
0 5	13.8	13.9	17.4	16.0	10.0	23.1	26.5	16.7	20.1	17.3
0 6	20.1	18.0	20.3	22.0	17.3	21.5	27.6	24.1	20.8	20.4
0 7	19.6	18.5	25.4	19.2	18.4	20.3	26.5	25.3	20.8	19.5
0 8	18.2	18.6	20.4	19.5	19.7	22.7	31.2	25.7	20.6	23.4
0 9	21.4	17.3	23.7	23.7	21.9	25.1	28.9	24.8	18.1	26.0
1 0	5.7	5.7	6.9	9.9	18.4	8.6	12.2	17.0		
1 1	20.8	19.7	23.2	20.5	20.4	24.7	23.2	21.1	22.7	21.5
1 2	24.1	20.0	25.4	27.5	22.3	24.0	31.8	30.4	24.1	16.3
1 3	19.6	23.9	22.4	25.5	18.2	21.3	24.9	21.4	15.1	24.4
1 4	25.5	19.2	28.5	10.2	22.7	27.8	15.6	12.7	14.8	25.0
1 5	19.6	19.9	18.7	20.4	17.6	30.0	32.1	27.9	29.9	20.6
1 6	18.5	19.6	29.2	21.6	18.3	12.1	21.5	28.1	23.8	18.3
1 7	6.4	5.1	8.2	15.3	17.7	20.7	18.9	17.7	19.8	13.6
1 8										
1 9	15.5	16.2	19.8	19.2	15.6	17.5	21.9	20.0	16.5	17.9
2 0	26.2	20.5	15.6	14.3	21.3	22.3	35.5	28.6	18.7	11.7
2 1	18.9	21.4	18.6	6.1	16.2	14.8	11.7	10.3	12.9	22.0

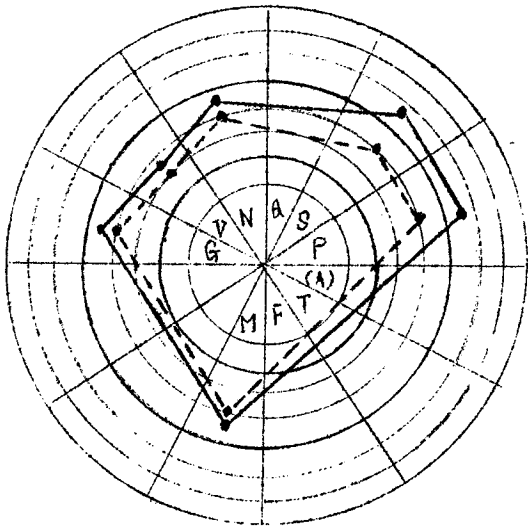
—— 職種のプロフィール
 - - - 基準プロフィール



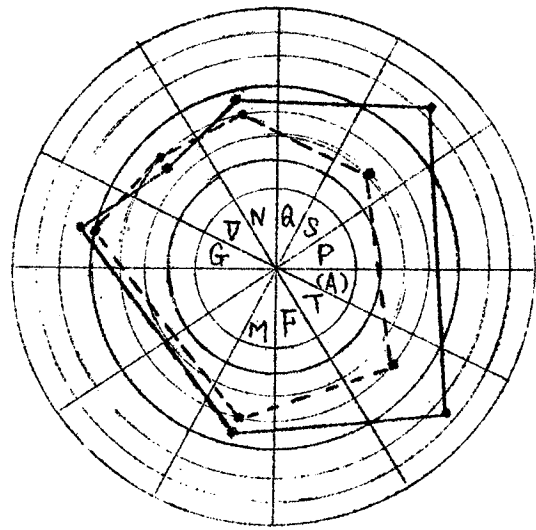
第 9 - 1 図 電子関係職種



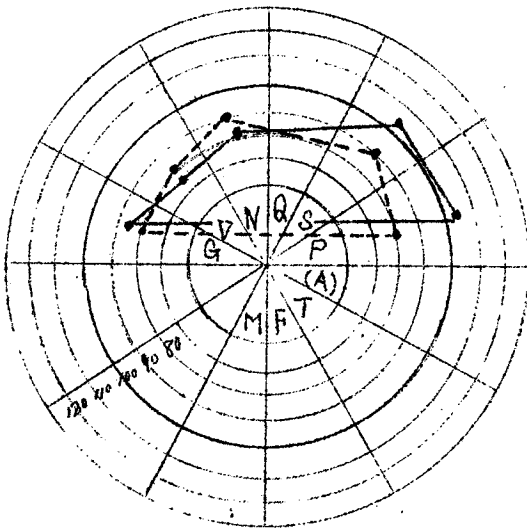
第 9 - 2 図 電気関係職種



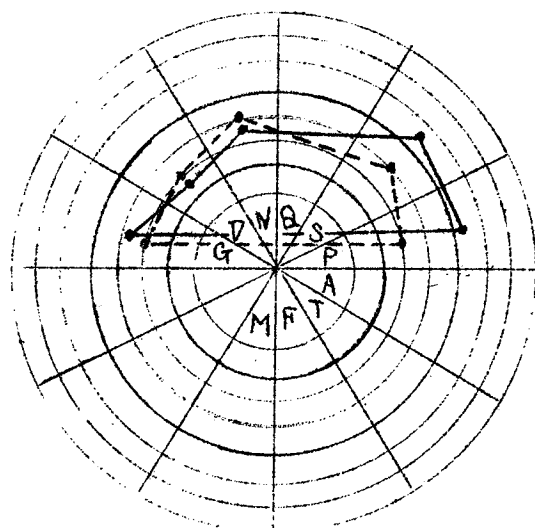
第9-3図 機械関係職種



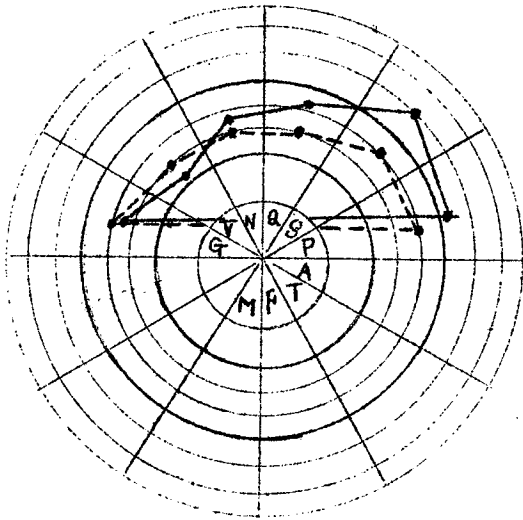
第9-4図 自動車整備



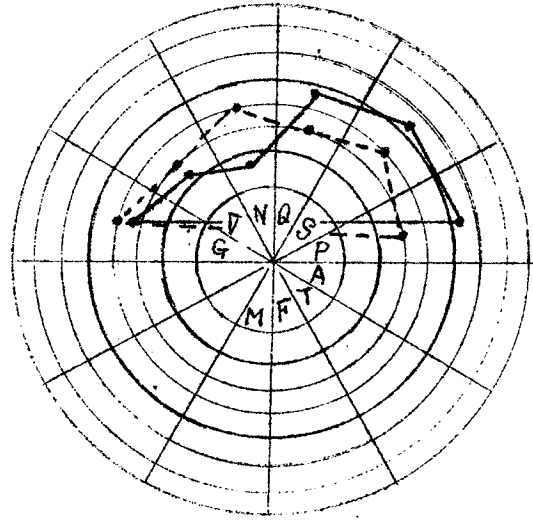
第9-5図 板金



第9-6図 溶接



第9-10図 木 工



第9-11図 塗 装

4. 中卒訓練生集団の職業興味について

中卒訓練生について、知能検査からみた素質および職業適性検査からみた素質の実態について分析してきた。本節では、素質を素質として生かす特性として職業興味をとりあげ、総訓生の職業興味の実態を分析する。

職業興味は職業選択、職業訓練での成功および職業生活上の成功と関連がある。

興味をもっている人はそうでない人よりも成功する割合が高いと常識的には考えられる。

しかし、職業においては、ある活動に対して興味があるというだけでは、かならずしも成功と強い関係があるとはいえない。

適性と興味とがうまくかみあつて、はじめて職業訓練における成功に結びつくのである。つまり、D、E、Superが言っているように、適性はそれぞれの職業において、どれほど先へ進む能力があるかをあらわすのに対して、興味はどの職業を選択するかということに関係する要因といえるのかもしれない。⁶⁾

もし、現状の中卒訓練生の進路選択が自己の意志にもとづいていれば、かなり職業興味が職業訓練職種と一致しているはずである。

ところが、中学校進路指導は前述のごとく知的特性を中心におこなっているので、職業訓

練への進路についても、職業興味を配慮することなく、流れこんでくる可能性もある。

このような状況の中で、訓練校に入ってくる一人の青少年が自己の興味とはまったくかけはなれた仕事について、2年間学習するのは、その青少年にとって精神的苦痛以外のなにものでもあるまいと思うのである。

そこで、本研究では中卒訓練生の職業興味の実態を Lee and Supe の職業興味検査をもとに標準化した、藤原式の「職業興味テスト」を使用して客観的に把握することにした。

このテストは「領域」、「型」、「水準」の三つから解釈できるように構成されている。

前報にも述べたように、職業訓練で学ぶ青少年に対して、次の仮説のごとき職業興味をもつことを期待している。⁷⁾

つまり、

- (1) 職業興味の領域については、「機械的領域」に関心をもっていること。
- (2) 職業興味の型については、「技能的型」に関心をもつこと。
- (3) 職業興味の水準は知能水準とほぼ同一水準であること。

このような仮説のもとに、3年間にわたって調査した、15才から16才段階の職業訓練に学ぶ青少年の職業興味の実態を分析する。

1. 中卒訓練生の職業興味の平均的傾向

中卒訓練生の職業興味の平均値プロフィールは第10図のごとくである。

3年間を通していえることは、「機械的領域」に高い値を示し、「対人的、社会的領域」および「芸術的領域」にやや低い値を示している特徴がある。

つまり、「機械的領域」と塗装、大工仕事など維持に関すること、工場の機械操作、ラジオ、テレビ修理、モーター修理など修繕に関する仕事、設計製造などの職業訓練職種にとりあげられている仕事に興味を示している。⁷⁾

それとは逆に、「対人的、社会的領域」は教育、保険医事、法律実施、理髪、家事など個人またはグループとの接触および奉仕などの仕事には興味を示していないのである。

また、「芸術的領域」というのは、手芸、彩色描画、装飾、演劇、ラジオ、文芸活動、など芸術に関する仕事の領域である。この領域に対しても、訓練生は職業興味を示していないのである。

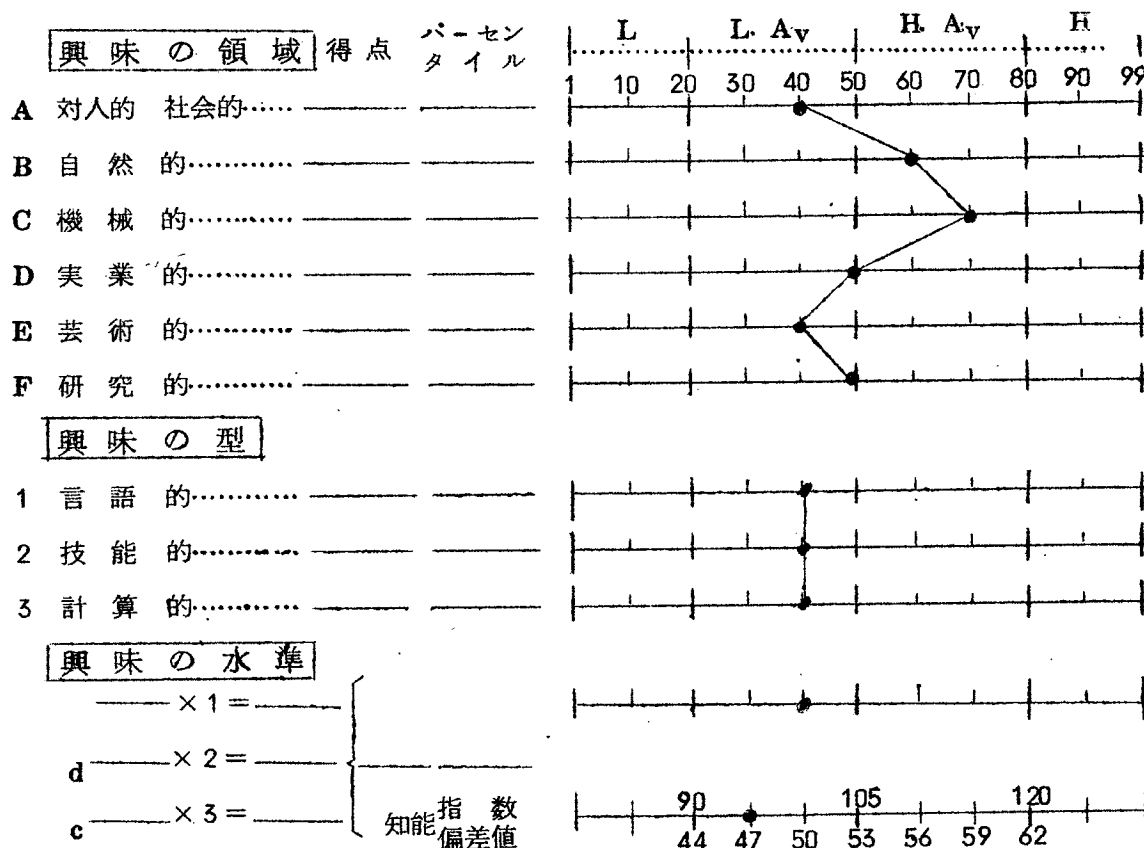
5) 日本職業指導協会 : 職業的発達理論 (職業指導セミナー) 1964

6) 訓大調査研究部 : 総訓生の素質調査 1969

7) 機械的領域とは単に機械工に対する興味を示すものではない。

これはあくまでも、中卒訓練生集団の平均値からみた傾向で、個々の訓練生についてみればこのテストの6つの領域に特徴をもったパターンを示している者もある。

さらに、職業興味水準についてみると、50パーセンタイルであり、知能偏差値の平均がSS47であるから、知能と職業興味水準とはほぼ一致しており、中卒訓練生集団に対するテスト仮説と一致したわけである。



第10図 中卒訓練生の職業興味プロフィール

2. 総高訓と他の進路選択者との職業興味傾向の比較

総高訓に進んだ者と後期中等教育機関の他の進路に進んだ者と職業興味プロフィールを比較するとどのような差異があるだろうか。

藤原氏の研究によると、次のような傾向をしめしている。⁸⁾

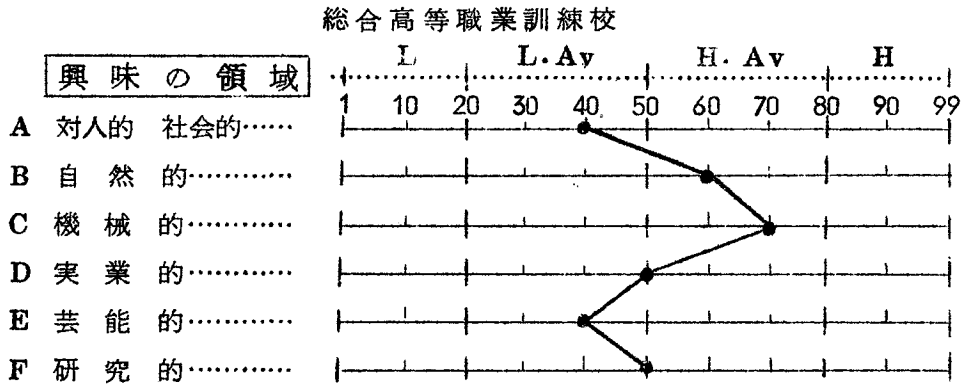
男子普通高校1,700名、男子農業工高生247名、男子工業高校生189名に興味テストを実施した結果、農業高校生は普通高校生より、「自然的領域」において高い得点を示している。また、工業高校生は普通高校生より「機械的領域」において高い得点をしめしている。

8) 藤原喜悦 : 職業興味テストの手引 (金子書房)

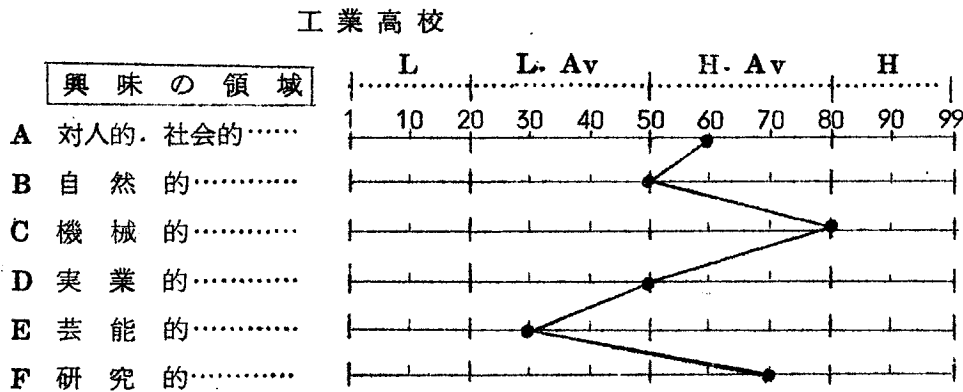
総高訓生は普通高校生より「機械的領域」で高い得点を示している。

また、総高訓生は工業高校生と比較すると「機械的領域」に高い得点を示すことにおいては同一であるが、「研究的領域」については高い得点でないことが異なっている。

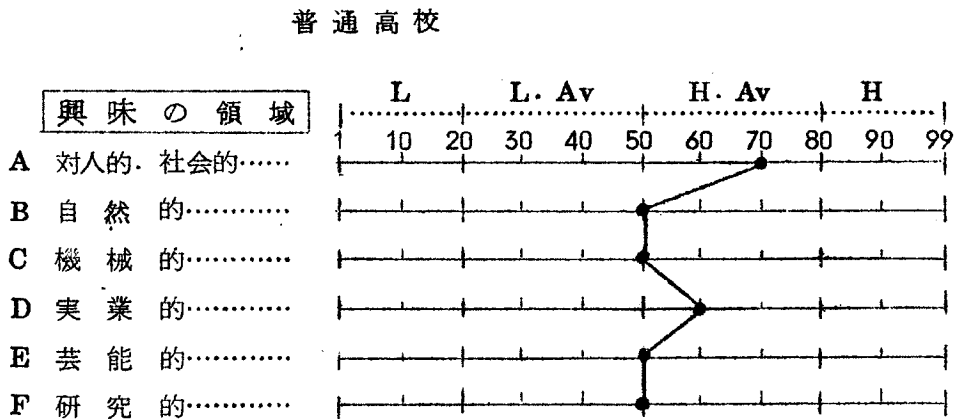
このように、中卒訓練生の職業興味のもたれている実態が明確になった。



第 11 - 1 図

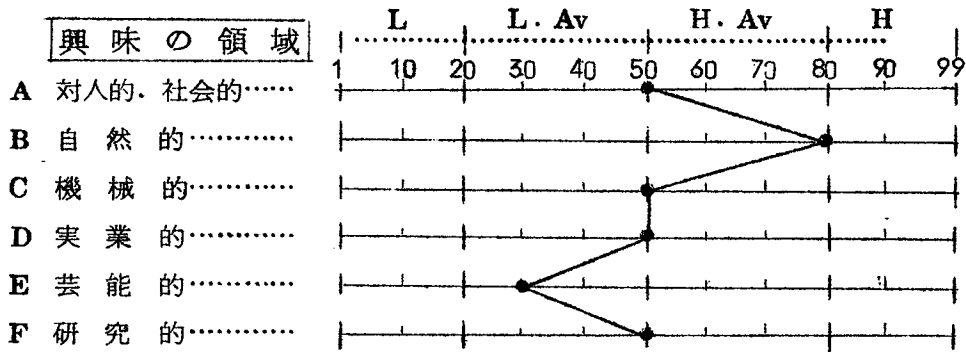


第 11 - 2 図



第 11 - 3 図

農業高校



第 11 - 4 図

3. 職業興味の年次変化

職業興味の前平均値を年次的に3年間みると、ほとんど変化はないといえる。

しかし、あえて詳細にみると、43年と44年度は領域、型、水準ともにほとんど同様の値を示しているが、45年になって、職業訓練生に期待している「機械的領域」の前平均値がいくらか低くなっている。それと同時に「対人的、社会的領域」への興味も値が低くなっていることは認められる。(第19表)

この傾向を中卒訓練生集団の職業興味が好きしくない方向に変化していると断言することはできないが、職業訓練職種に興味をもたない訓練生が若干増加しつつあると解釈できるであろう。

この傾向を詳細にみるために、「機械的領域」について、30パーセント以下の前平均の低い訓練生の比率を年次的にしらべたのが

第 19 表 職業興味の前傾向

(中卒訓練生)

興味	年度	パーセント			粗点		
		43	44	45	43	44	45
領域	A 対人的	40	40	30	15		14
	B 自然的	60	60	60	21		21
	C 機械的	70	70	60	26		25
	D 実業的	50	50	50	18		18
	E 芸術的	40	40	40	19		19
	F 研究的	50	50	50	20		19
型	1 言語的	40	40	40	8		8
	2 技能的	40	40	50	10		10
	3 計算的	50	40	40	10		9
水準	L 興味水準	40	40	40	60		59

第20表である。

つまり、43年が12、6%、44年が13、4%、45年が13、9%と徐々にではあるが職業訓練職種と職業興味とが一致しない者の比率が増大している。

つまり、素質の低下が徐々に進行する傾向と平行して、職業興味が訓練職種にあわない者も徐々に多く入校している実態にあるといえよう。

つぎに、「技能的型」および「興味の水準」では年次的な変化は認められず、3年間同様の傾向であった。

さらに、「機械的領域」「技能的型」「興味水準」について、パーセンタイル分布を年次別にみたのが第21表である。

これは、個人の職業興味プロフィールを解釈する場合の規準となりうる。

第20表 職業興味からみた不適応訓練生率(中卒者)

年次	年次		
	43	44	45
C. 機械的領域	12.6	13.4	13.9
2. 技能的型	21.0	22.2	21.5
4. 興味の水準	21.7	22.2	21.6

第21表 職業訓練に必要な要件の職業興味の年次変化 (中卒訓練生)

段階	年次	段階										
		1	10	20	30	40	50	60	70	80	90	99
C. 機械的型	43	0.2	0.9	3.2	8.2	8.4	5.4	16.9	8.4	15.4	21.6	11.4
	44	0.2	1.8	4.1	7.5	8.1	7.7	12.9	8.4	15.9	20.6	12.2
	45	0.1	1.6	3.7	8.5	8.7	6.0	15.5	7.1	14.5	21.6	12.7
2. 技能的型	43	0	12.5	8.6	13.2	13.0	13.4	13.9	9.7	7.0	5.2	3.1
	44	0	12.8	9.4	11.7	14.4	14.9	10.9	11.4	7.0	4.1	2.9
	45	0	13.9	7.6	10.4	11.6	12.4	15.9	13.4	9.1	6.8	5.6
L. 興味の水準	43	1.0	7.7	12.8	19.0	10.5	11.6	11.2	6.7	11.2	2.7	4.5
	44	0.1	8.9	13.2	19.8	10.3	10.7	9.5	9.3	10.1	2.8	3.8
	45	0.4	8.6	12.6	17.6	11.6	11.5	9.3	10.3	7.1	3.3	4.0

3. 総高訓別の職業興味

職業興味の実態は総高訓別でどのくらい異なるのであろうか。

その実態を示したのが第22表である。

「機械的領域」の平均パーセンタイルをみると、80段階は総高訓「20」1校、70段階が7校、60段階が10校、50段階が総高訓「17」1校である。

さらに、パーセンタイル段階ごとの頻数分布をみたのが第24表であるが、これでもあきらかなように、総高訓「17」の職業興味、「機械的領域」の分布は低い方に片寄っており、30パーセンタイル以下の者が調査総高訓中最も多く、22.3%である。

つまり、訓練職種の性格に対して興味を一致させていない者が多いわけであるから、適性要因のその他との関連も考慮して原因を追求する必要がある。

「機械的領域」で30パーセンタイル以下をしめる訓練生は職業訓練職種に興味をもっていないのであるから、一応、職業興味テストからみた問題傾向者といえる。

この職業興味問題傾向者を総高訓別にみると、19校のうち8校が、44年よりも45年の問題者の比率が減少している。特に、総高訓「14」においては、職業興味問題傾向者はほとんど入校していない実態である。つまり、中卒訓練全員が訓練の職務性格に興味をしめしているといえる。

逆に、調査総高訓のうち6校は職業興味問題傾向者が増加している。その中でも、総高訓「04」は44年の9.3%から、45年には17.2%とその比率が急増している。

職業興味の不一致からの中退者の増加も予測されるので、中学校進路指導や入校選考の方式に問題がなかったかどうか検討しておく必要がないであろうか。

2年間にわたって、個人ごとに訓練成績などとの関連から職業興味の低い者を追跡してみると、機械的領域で30パーセンタイル以下の訓練生は中途退校する事例が認められていることからこの総高訓としても注意すべき兆候であろう。⁹⁾

つぎに、「技能的型」について総高訓別にみると、60パーセンタイルが7校、50パーセンタイルが12校であり、総高訓による差はあまり認められない。(25表)

さらに、職業興味水準をみると、50パーセンタイルが3校、40パーセンタイルが13校、30パーセンタイルが3校である。

水準で低い値を示す総高訓「03」「07」「16」について、第27表の興味水準段階ごとの分布をみると平均値ばかりでなく、10ないし20パーセンタイル段階での頻数分布が多く

9) 戸田勝也：職業興味テストの実際的活用について、

(テスト事例集 第2集、1970 金子書房)

この3校は職業に対する期待水準が低い者が多い実態にあるといえる。

職業に対する期待水準は知能程度と一致することがよいとされているが、集団全体として、職業興味水準が低いことが、総高訓として、あるいは地域の人々の職業に対する考え方に影響されているのか原因を追求することも訓練生を理解する一つの指標となるであろう。

さらに、中卒訓練生の3年間を通じての職業興味の実態をみると、全般として、職業訓練職種に興味をしめしているものが約80%いることもわかった。

逆に、興味をもっていない者が総高訓に約20%在籍している実態もみのがすことはできないことである。

第22表 職業興味在校別プロフィール (中卒訓練生)

		校名																			
		01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	14	15	16	17	18	19	20	
領域	A 対人社会	20 ^x	30	30	40	40	40	40	50	40	40	40	30	30	30	30	30	50	30	30	
	B 自然的	60	60	60	50	50	60	70	70	60	60	70	60	70	60	70	60	70	60	70	
	C 機械的	70	70	70	60	70	60	60	70	60	60	60	60	70	70	60	50	60	60	80	
	D 実業的	50	50	50	80	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	60	40	50	50	
	E 芸術的	50	30	40	40	50	40	30	30	40	50	30	30	30	40	50	50	30	40	30	
	F 研究的	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	40	40	50	50	50	
型	1 言語的	30	30	30	40	40	40	30	40	40	40	40	30	30	30	30	40	40	30	30	
	② 技能的	50	50	50	40	50	50	40	40	50	50	40	50	50	50	40	40	40	50	50	
	3 計算的	50	50	40	50	50	40	40	40	50	50	40	50	40	40	30	40	50	40	50	
水準	L 興味水準	40	40	30	40	50	40	30	40	40	40	40	40	40	40	30	50	40	50	40	

407

第23表 職業興味職種別プロフィール (中卒訓練生)

		職種												
		01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13
領域	A 対人社会	30	30	30	30	30	30	30	30	30	80	30	60	60
	B 自然的	50	50	60	60	60	60	60	70	70	80	70	60	70
	C 機械的	70	70	70	70	50*	70	70	60*	60*	40*	60*	40*	40*
	D 実業的	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	60
	E 芸術的	40	40	40	40	50	40	40	40	30	20	50	50	40
	F 研究的	50	50	50	50	60	50	40*	50	50	40*	40*	50	30
型	1 言語的	40	30	30	30	30	40	30	40	30	60	30	50	60
	② 技能的	60	50	50	50	40	50	50	40	40	30	50	40	30
	3 計算的	50	50	50	50	50	40	40	40	40	50	40	50	20
水準	L 興味水準	50	50	40	40	50	40	40	40	40	60*	30*	40*	30*

第 24 表 機械の領域

(中卒訓練生)

校	1	10	20	30	40	50	60	70	80	90	99		
												45	44
01		2	5	11	12	11	20	12	26	41	20	11.1	17.4
02		1	3	7	10	7	26	6	23	24	18	8.8	9.3
03		4	1	14	9	3	19	7	21	27	16	15.7	9.4
04			7	8	10	5	12	9	11	15	10	17.2	9.3
05			2	6	6	4	12	9	11	26	8	12.9	14.2
06			4	6	5	4	7	4	11	13	6	16.7	21.6
07		3	6	7	10	5	21	7	8	19	9	16.8	15.4
08			2	6	6	4	8	1	4	11	9	15.7	11.3
09		2	7	4	9	3	16	12	5	32	15	12.4	16.2
10		2	2	7	6	4	10	2	7	8	7	20.0	15.4
11	1	3	3	23	18	8	35	9	21	24	18	18.2	14.8
12		1		7	6	8	10	8	13	13	10	10.5	16.7
14				1	1	2	5	5	15	35	14	1.3	10.8
15		2	3	11	8	8	13	5	21	17	18	15.9	8.6
16		3	5	7	7	5	9	9	12	11	6	20.3	
17		1	3	4	5	3	7	2	4	3	3	22.3	
18			1	1	2	1	2	1	1	2	1	16.7	
19	1	1	4	6	6	6	13	5	11	20	10	14.5	
20			1		2		2		6	4	4	5.3	

13.9%

第 25 表 技能の型

(中卒訓練生)

校	1	10	20	30	40	50	60	70	80	90	99
01	1	15	10	15	20	16	21	26	13	10	11
02		8	5	14	8	10	24	24	15	13	4
03		7	7	19	20	11	14	14	20	5	7
04		10	5	12	7	13	10	9	4	4	5
05		5	7	7	13	5	15	8	14	7	5
06		4	5	6	8	11	12	2	4	2	6
07		13	7	9	6	15	20	12	2	5	4
08		7	4	4	5	10	7	7	4	2	2
09		11	9	12	15	16	14	13	11	8	4
10		7	5	4	5	5	8	7	7	5	1
11		18	15	15	17	20	26	19	10	5	5
12		9	4	11	17	7	6	6	5	7	3
14		10	6	5	7	12	13	14	8	2	4
15		6	8	10	6	23	13	16	14	7	7
16		9	9	6	9	8	18	6	3	3	5
17		3	3	4	9	3	2	1	4	3	3
18			4	1		4		1	1		1
19		6	8	12	8	10	12	8	6	5	7
20			2	2	7	1	1	3	1	1	2

21.5

31.9

第 26 表 興味の水 準

(中卒訓練生)

校	1	10	20	30	40	50	60	70	80	90	99
01	1	19	21	27	17	14	11	19	10	8	8
02		10	19	27	9	14	15	16	7	2	5
03		14	19	19	15	11	17	6	9		8
04		4	6	17	11	9	10	7	10	1	3
05		5	10	10	8	9	9	9	18	4	4
06		4	9	10	6	9	4	4	7	3	4
07		16	14	16	12	9	6	9	10	2	3
08		1	7	9	7	15	4	6	4		
09		8	5	14	17	10	12	15	23	7	5
10		4	5	14	6	6	8	4	6	1	1
11	1	7	32	31	19	14	16	9	19	7	6
12		5	6	20	10	8	6	5	10	3	3
14	3	4	9	7	8	14	2	18	7	5	3
15	1	11	10	23	10	14	13	9	11	3	1
16		16	10	13	8	7	5	6	6	2	1
17		2	2	5	6	2	4	0	5	1	1
18			3	3	1		2		2		1
19		4	12	12	9	15	3	14	7	2	5
20		3	1	3	5	3		1	1	1	1
		21.6									
			34.2								

4. 訓練職種別の職業興味傾向

訓練職種によって職業興味の傾向がかなり異なるのではないかと予測される。

その調査結果をしめたのが第 23 表である「機械的領域」についてみれば、職種群の平均値が 70 パーセントイルであるのは、電子科、電気科、機械科、仕上科、自動車整備科、板金科である。

60 段階は溶接科、鋳物科、木工科で、50 段階は精密機械科である、40 パーセントイルの低い段階を示す科は配管、塗装、ブロック建築となっている。

このように、訓練職種によって、興味の領域の値がかなり異なっている。

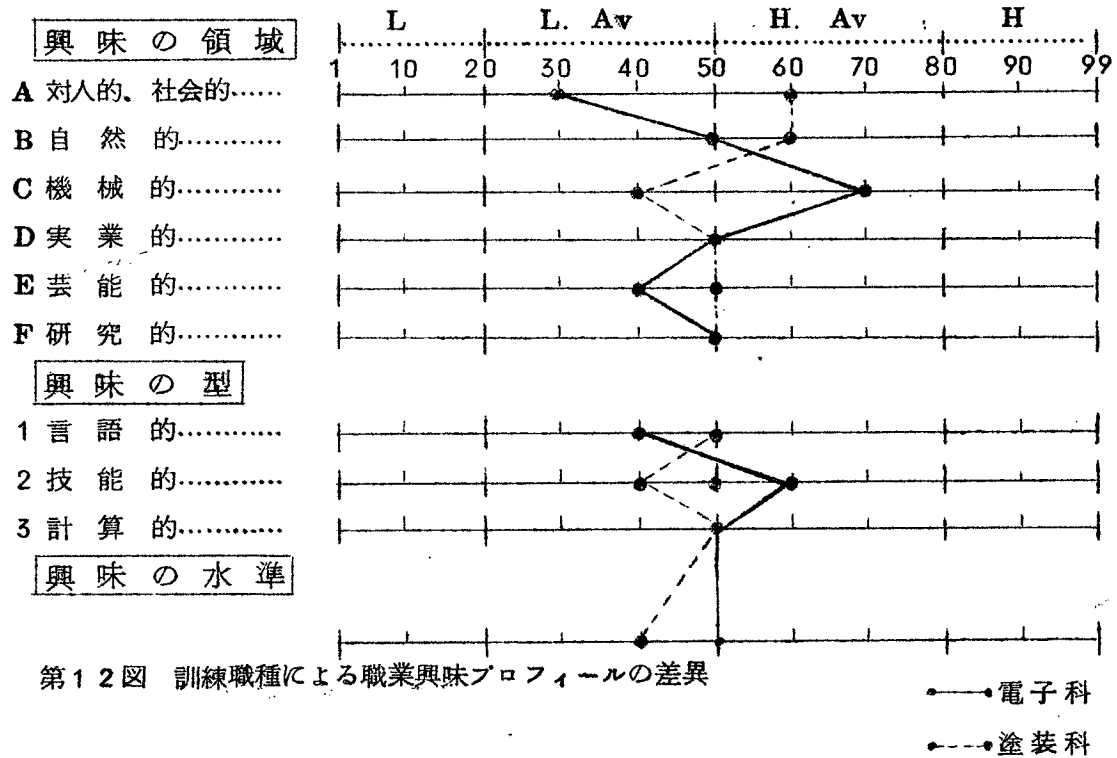
また、「技能的型」についてみると、60 段階は電子科、50 段階は電気、機械、仕上、自動車整備、板金、木工であり、40 段階は精密機械、溶接、鋳物、塗装、30 段階はブロック建築となっている。

代表的な職種として機械科の職業興味プロフィールを示したのが第 13 図である。

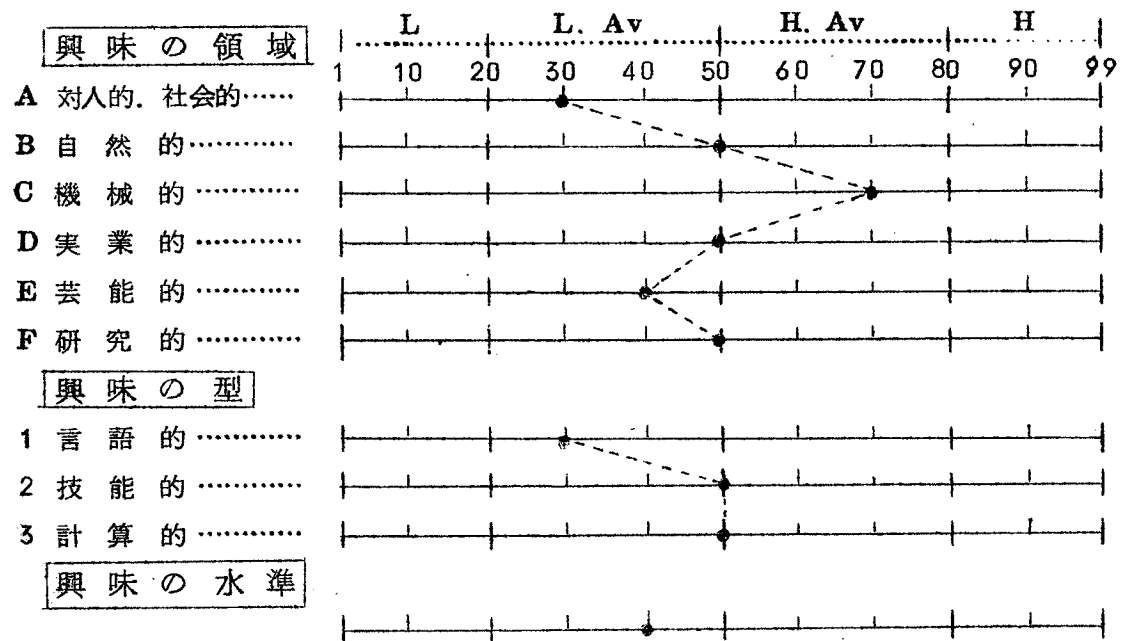
また、電子科と塗装科を比較して訓練職種によって職業興味の傾向の異なることを示したのが第 12 図である。

以上のように、訓練校によっても、訓練職種によっても職業興味の傾向は異なるのであるから、個人の能力、性格特性の理解にあたっては、個々の青少年の属する集団の特性を把握し、それをもとに能力、適性に応じた訓練が実践されるべきである。

このような意味で、中卒訓練生集団の素質ならびに職業興味の特性の把握は有意義であると考ええる。



第12図 訓練職種による職業興味プロフィールの差異



第13図 機械科の職業興味プロフィール